

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 52

- 第28回 学術集会のご案内
- 第27回 学術集会/総会を終えて
- 第27回 総会報告
- 寄稿 佐藤 博 名誉会員(19回会長)
- 第22回 研究奨励賞受賞報告
 - 神田 裕介 (鳥取大学)
 - 神田 光郎 (名古屋大学)
- 会則/役員選任規程/役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第28回日本がん転移学会学術集会/総会の開催にあたって

会長 夏越 祥次 (鹿児島大学 消化器・乳腺甲状腺外科学)

2019年7月25日(木曜日)、26日(金曜日)に鹿児島市で第28回日本がん転移学会学術集会・総会を開催させていただきます。伝統のある本学会を開催させていただくことは、教室ならびに同門にとりまして大変光栄なことで、このような機会をいただきました名誉・功労会員、理事、監事、評議員、会員の皆様に深く感謝申し上げます。

鹿児島での開催は、愛甲孝名誉教授が2008年に第17回の本学会総会を開催されて以来11年ぶりになります。当時は事務局を担当して演題整理やプログラム作成をしていたことが懐かしく思いだされます。その後の10年間でがんの診断技術や治療法も大きな進歩を遂げ、治療成績の向上に寄与してきています。

さて、今回のテーマは「見える転移、見えない転移との闘い」とさせていただきます。がんの治療成績の向上は転移の制圧によって決まるといっても過言ではありません。「見える転移」に関しては治療方針を決定するために正確な転移診断が重要です。その診断に基づき、手術療法、化学療法、放射線療法、分子標的療法、免疫療法を駆使して転移を制御する必要があります。治療効果を画像診断や遺伝子・分子生物学的診断で、どのように評価するかも重要です。近年、切除不能進行癌や遠隔転移例に対して、様々な治療後に手術(conversion surgery)を行い予後の向上が見られています。

一方、「見えない転移」については、本当にがん癌細胞がないのか、がん細胞が存在するが見えていないのか、未だ不明なことが多くあります。実臨床では10年以上たって再発する症例もまれではありません。血中、骨髄、臓器、リンパ節などに潜む転移の本質について、様々な角度から、様々な手法を用いて、基礎的・臨床的に発表していただきたいと思います。

7月の鹿児島は夏真っ盛りですが、暑さを忘れるくらいの熱い学会になることを期待しております。学会で一生懸命に勉強された後には、鹿児島の焼酎と食材を思う存分堪能していただければと思います。皆様の多くのご発表とご参加をよろしくお願い申し上げます。

会 期 : 2019年7月25日(木)～26日(金)

会 場 : 城山ホテル鹿児島(鹿児島市新照院町41番1号)

テーマ : “見える転移、見えない転移との闘い”

第28回総会事務局

【事務局】 蔵原 弘 鹿児島大学大学院 腫瘍学講座 消化器・乳腺甲状腺外科学
〒890-8520 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
Tel:099-275-5359 Fax ; 099-265-7426

【運営事務局】

株式会社コングレ 九州支社 〒810-0001 福岡市中央区天神1-9-17
ホームページ <http://www.congre.co.jp/jamr2019/>

E-mail : jamr2019@congre.co.jp

第27回日本がん転移学会学術集会・総会を終えて

第27回日本がん転移学会会長 越川 直彦
(神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん生物学部)

第27回日本がん転移学会学術集会・総会を平成30年7月19(木)、20日(金)の2日間にわたり、横浜・山下公園前のホテルメルパルク横浜において開催させて頂きました。今年の横浜は、6月末に梅雨が明け、日中の気温が軽く35度を超える猛暑日の中の開催となりましたが、2日間でシンポジウム、一般演題を含め約120演題の発表を行い、国内外から約280名の会員、非会員の方々にご参加いただき、「平成」最後の学術集会・総会を盛大に終えることができました。ここに、座長、演者およびご参加いただきました皆様に心から御礼を申し上げます。

本学術集会では、「がん転移制圧に向けた異分野融合による技術革新」を主要テーマと掲げ、工学、化学、数理学などの異分野技術を融合した独創的ながん転移研究を展開する国内外の先生方にご講演を頂きました。初日午前のシンポジウムでは、「ドラッグデリバリーシステムによるがんの革新的診断・治療戦略」というタイトルのもと、がん制圧に向けた医工連携の最先端のご講演をお聞きすることができました。また、2日目午前は「数理・データサイエンスを用いた腫瘍学研究」という題目で数理腫瘍学のシンポジウムが行われました。数理腫瘍学は創成されて日が浅く、また、数学は生命系の研究者になじみの薄い領域であるため、当初、ご参加していただける先生が少なくなることを心配しておりました。しかし、予想に反して、多くの方にご参加して頂き、たいへんに活発なディスカッションを行うことができました。

現在、がん転移の研究領域は他のがん研究領域に比べ閉塞した状況にあり、新たな技術革新を起こすためには異分野領域の技術導入が必要であります。文明開化の地、横浜での学術集会が、異分野技術を今後のご研究に取り入れられるきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、名誉会員、理事、評議員の先生をはじめ、多くの会員の先生方のご支援とご協力で本学術集会を盛会裏に終えることができました。また、会期中は不行き届きの点が多々あったと思います。改めてお詫びと皆様のご協力に御礼申し上げます。本学術集会の運営に多大なご協力・協賛を頂きました企業、団体各位、並びに、神奈川県立がんセンター臨床研究所・がん生物学部、東京大学医科学研究所のスタッフと大学院生の方々に心より厚く御礼申し上げます。



ポスター賞受賞者
(左から西田純、蔵原弘、越川会長、森本真弘、白木原琢哉、星野大輔)

※敬称略

第27回日本がん転移学会総会記録

2018年7月19日（木）評議員会で下記報告事項と議案が審議され、さらに同日の総会において報告・承認された（総会出席者48名、委任状87通）。

I - 1. 庶務報告

1) 会員状況（2018年7月11日現在）

顧問：3名	名誉会員：22名	功勞会員：27名
個人会員：622名	法人会員：7社	

事業報告

1) 学術集会

2017年7月27日・28日、大阪国際会議場に於いて学術集会を開催した。

2) 評議員会・総会

平成29年7月27日の学術集会開催時、大阪国際会議場に於いて評議員会の議を経て平成28年度収支決算・平成29年度予算、第27回副会長夏越祥次選任を審議決定し、総会にて報告した。

3) 理事会を3回（2017. 10. 20：横浜、2018. 3. 8：横浜、2018. 7. 18：横浜）

4) ニュースレターの発行

Vol. 50(平成29年9月)、Vol. 51（平成30年4月）

2. 平成29年度収支決算および監査報告書が提出され承認された（次ページ）。

3. 平成30年度予算（案）が承認された（次ページ）。

4. 平成30年度役員（会長・理事・監事）が承認された（次ページ）。

5. 次期副会長に神戸大学大学院医学研究科 病理学講座病理学分野の横崎 宏評議員が選出された。

6. 第13回会長の横田淳先生、第19回会長の佐藤博先生、第20回会長の今野弘之先生が名誉会員に、伊藤壽記先生、松浦成昭先生が功勞会員に推戴された。

7. 研究奨励賞を2名に授与した。

平成29年度収支決算

(収入の部)

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

科 目	予 算	決 算	差 異
年会費	(4,100,000)	(4,569,000)	(469,000)
個人会費	2,700,000	3,169,000	469,000
法人会費	1,400,000	1,400,000	0
戻入 (総会補助費)	0	389,186	389,186
預金利息	(200)	(23)	(△ 177)
普通預金	200	23	△ 177
収入合計	4,100,200	4,958,209	858,009
繰越金	8,182,372	8,182,372	0
総計	12,282,572	13,140,581	858,009

(支出の部)

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

科 目	予 算	決 算	差 異
事業費	(2,200,000)	(2,200,000)	(0)
学会総会補助費	1,500,000	1,500,000	0
研究推進活動費	500,000	500,000	0
研究奨励賞費	200,000	200,000	0
会議費	(300,000)	(308,904)	(△ 8,904)
理事会等会議費	300,000	308,904	△ 8,904
管理費	(2,245,000)	(2,312,309)	(△ 67,309)
印刷製本費	200,000	254,340	△ 54,340
通信運搬費	350,000	314,561	35,340
消耗品費	50,000	222,444	△ 172,444
給与・手当	1,360,000	1,345,419	14,581
旅費	40,000	32,490	7,510
諸雑費	110,000	79,395	30,605
賃貸料	120,000	20,460	99,540
ホームページ費	15,000	43,200	△ 28,200
予備費	(500,000)	(0)	(500,000)
支出合計	5,245,000	4,821,213	423,787
繰越金	7,037,572	8,319,368	0
総計	12,282,572	13,140,581	858,009

(財産目録)

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

科 目	金 額		
I 資産の部			
流動資産			
普通預金 りそな銀行	1,356,224		
郵便振替口座	963,144		
郵便定額預金	6,000,000		
流動資産合計		8,319,368	
資産合計			8,319,368
II 負債の部			
流動負債			
未払金	0		
流動負債合計			0
負債合計			0
正味財産			8,319,368

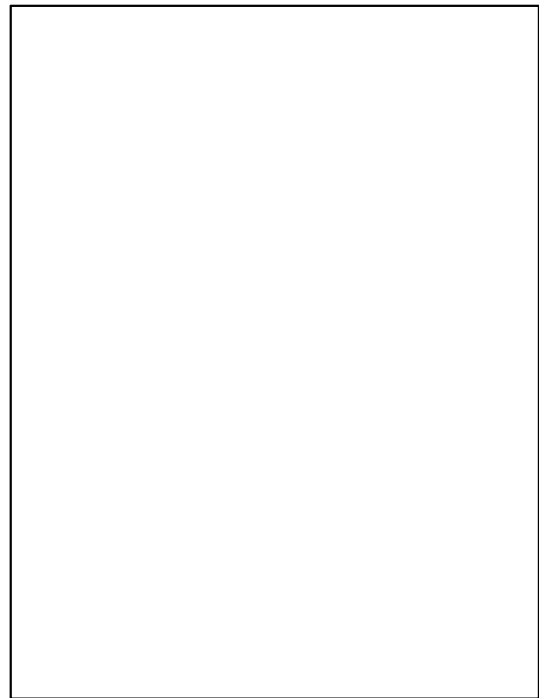
※：平成30年度「第27回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

平成30年度予算

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

科 目	収入予算	科 目	支出予算
年会費	(4,200,000)	事業費 ※	(2,400,000)
個人会費	2,800,000	学会総会補助費	1,500,000
法人会費	1,400,000	研究推進活動費	500,000
		研究奨励賞費	400,000
預金利息	(20)	会議費	(200,000)
		理事会等会議費	200,000
		管理費	(2,185,000)
		印刷製本費	250,000
		通信運搬費	350,000
		消耗品費	50,000
		給与・手当	1,360,000
		旅費	40,000
		諸雑費	120,000
		ホームページ費	15,000
		予備費	(500,000)
			500,000
収支合計	4,200,020		5,285,000
繰越金	8,319,368		7,234,388
総計	12,519,388		12,519,388

※：平成31年度「第28回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費



名誉会員
横田 淳
佐藤 博
今野 弘之
功労会員
伊藤 壽記

寄稿 1 : 私とがん転移研究

佐藤 博 名誉会員 (第19回会長、金沢大学名誉教授)

私は昨年3月末に足掛け40年お世話になった金沢大学がん進展制御研究所(旧がん研究所:がん研)を定年退職いたしました。この度は、日本がん転移学会より名誉会員に推戴して頂き厚く御礼申し上げます。

日本がん転移学会は転移研究会として発足し、今年が第27回でした。第1回の研究会から参加させて頂いた私としては殊の外思い出深い学会です。多くの諸先輩方のように、私も転移学会に育てられた一人です。第1回の研究会が末舛先生により開催された1992年当時、私はがん研にて清木元治先生(金沢大・がん研→東京大・医科研)とマトリックスメタロプロテアーゼ(MMP)のプロジェクトを立ち上げた直後でありました。当時、IV型コラゲナーゼであるMMP-2、MMP-9ががん転移に重要であることは既に広く受け入れられていました。私たちの研究室の当時の名称は「ウイルス部」であり、清木先生はHTLV-1、私はEBウイルスの研究をしていました。当時のウイルス研究は遺伝子を取り扱う分子生物学的解析が主でした。一方、MMP分野は酵素を精製し解析する生化学的な研究が中心でしたので、この分野に分子生物学的手法でアプローチすることによりユニークなことができるのではないかと期待しました。最初に手掛けたのは、MMP-9の転写制御機構(プロモーター)の解析です。MMP-9の発現が悪性化がん細胞で亢進しているとの報告が多くあったので、そのプロモーターを解析することにより悪性化機構の解明に繋がることを期待しました。結果的にはMMP-9の発現は転写因子AP-1, Sp-1, NF- κ Bによって制御され、炎症反応により誘導されることが強く示唆されましたが、がん悪性化との関連性は見出せませんでした。個人的にはいささか期待はずれの結果でしたが、この論文は意外に好評で(被引用回数660回以上)、共同研究の申込も殺到しました。また、これを契機としてMMPの業界にも好意的に受け入れられるようになったと感じました。次に、当時実用的になったPCRを用いて新規MMP遺伝子の探索を開始しました。大学院生であった滝野隆久君(現金沢大学国際基幹教育院・教授)が苦勞の末に最初の膜型MMP(MT1-MMP)及びMT3-MMPをクローニングしました。PCRで得られたDNA断片をP-32標識プローブとして何十枚ものフィルターを用いたフェージライブラリーのスクリーニングなどにはウイルス研究で培った技術が(ゲノムプロジェクト終了後には無用の技術ですが)効果的でした。1994年にMT1-MMPの発見がNature誌に掲載され、本学会でも発表させて頂いた事を鮮明に覚えています。当時、清木先生も私も留学から帰国直後で(当時としては)グローバルな視点を有し、金沢大学医学部にはMMPの生化学と病理のエキスパートである岡田保典先生(金沢大・医→金沢大・がん研→慶応・医)がおられ、大学病院の多くの臨床医が我々の研究に協力してくれました。また、富山県の富士薬品工業(現第1ファインケミカル)がMMP抗体を作成してくれました。正に「天の時、地の利、人の和」が揃った状態でした。MT1-MMPはMMP-2の活性化因子として発表しましたが、その後次々と新規機能が見つかり、気が付けば退職までその解析に追われていました。がん細胞膜表面で様々な分子の切断を行う訳ですから細胞機能と密接に結び付くことは容易に想像が付きまします。実際に、MT1-MMPはがん転移のみならず様々な病態への関与が報告されています。お陰で最初の論文が今でも長く引用され続けています(被引用回数2100回以上)。これらの研究成果は、常に転移学会を中心に発表させて頂きました。2010年には会長を仰せつかり、第19回学術集会・総会を金沢で開催させて頂いたことは貴重な思い出です。本学会の更なる発展を期待しています。

寄稿2：第22回日本がん転移学会研究奨励賞を受賞して 受賞課題：肝転移のドライバー分子の決定

神田 裕介（鳥取大学医学部 病態生化学分野）
（現在：国立がん研究センター研究所 がん分化制御解析分野）

この度の第27回日本がん転移学会 学術集会・総会におきまして、第22回日本がん転移学会研究奨励賞を頂戴いたしました。このような歴史ある賞を頂きまして、まさに身に余る光栄でございます。会長の越川直彦先生をはじめ、賞選考委員の先生、ご推薦頂きました鳥取大学の岡田太先生、本会運営に携わった皆様に深く感謝申し上げます。

「転移」には、学部2年生の頃に受けた講義で初めて出会いました。転移の予防薬は存在せず、そのために多くのがん患者が亡くなる現状を知り、転移について深く知りたいと考えました。そこで、鳥取大学医学部病態生化学分野に教授として着任されたばかりの岡田先生を訪ねたところ、日本がん転移学会の名誉会員であるIsaiah J. Fidler博士が転移研究の歴史を纏めた総説（Cancer Res 70: 5649-5669, 2010）を紹介して頂きました。その論文を食い入るように読んだことを今でも鮮明に覚えております。そして、150年以上前から続く転移研究に私も関わりたいと強く思うようになりました。学部4年生より岡田先生の研究室に入り、培養技術や動物の扱い方等の実験手技の基本をご指導頂いた後に、修士課程1年から転移研究をスタートさせました。研究開始当初のテーマは「ヒト大腸がん細胞株からの肝転移株の樹立」でした。岡田先生と尾崎充彦准教授に、がん細胞株の脾臓内移植と転移株の樹立を繰り返すin vivo selection法の手技を徹底的に教えて頂きました。ヒト大腸がんから肝高転移株を樹立することが目的でしたが、その手始めとして、岡田先生が以前樹立されたQRsP-11マウス線維肉腫細胞株を親株として用いることにしました。結局はヒト由来の高肝転移株を取得することはできず、練習用に試したマウス腫瘍から目的の株を樹立しました。QRsP-11細胞は、尾静脈内移植すると肺転移を生じる一方、肝転移しにくい性質を持っております。In vivo selectionを開始した頃は、数ヶ月で肝転移株を取得できるだろうと予想しておりました。しかし、実際には、1サイクルのselectionを完了するのに1ヵ月もの期間を要し、気が付けば12サイクル（1年間）を繰り返しておりました。LV12細胞と命名した樹立株を尾静脈内移植した結果、肺転移能は親株と差はなく肝転移能が亢進していることを確認しました。無事、肝転移株を得られた安堵感に加え、今から約半世紀も前にI. J. Fidler博士によって確立されたin vivo selection法には、普遍の原理が存在することを実感しました。

次の段階として、LV12細胞の肝転移能と相関するin vitroの表現型を見出す実験に移りました。倍加時間やコロニー形成率、スフェロイド形成能、scratch & woundアッセイなどを行いました。親株とLV12細胞との差はありませんでした。そこで、肝転移成立に必須のステップである「血管内皮細胞との接着」に着目しました。Garth L. Nicolson博士が樹立したマウスの肝および肺組織由来の血管内皮細胞を北海道医療大学の濱田淳一先生を介して供与して頂きました。鳥取大学助教の小沼邦重先生にin vitro接着アッセイを教わり、LV12細胞の接着性を評価しました。その結果、LV12細胞は肺ではなく肝臓の血管内皮細胞に対して選択的に高い接着性を持つことが分かりました。さらに、接着性を規定する分子の探索を、DNAマイクロアレイ解析を用いて行い、接着分子のamphotericin-induced gene and open reading frame 2 (Amigo2)がLV12細胞で発現亢進していることを見出しました。誠に親しみやすい分子名ですが、siRNAを用いてLV12細胞のAmigo2発現をノックダウンすると、驚いたことに肝血管内皮細胞に対する選択的な接着性と肝転移が親株と同程度まで低下しました。逆に、親株にAmigo2を強制発現させると、肺血管内皮細胞への接着性は変化せずに肝血管内皮細胞への接着性と肝転移がLV12細胞と同レベルまで増加しました。これらの結果は、Amigo2が肝転移のドライバー遺伝子であることを意味しています。

次に、in vitroおよびin vivo実験で得られた知見がヒトに外挿できるかについて検討しまし

た。尾崎先生に病理切片の作製や組織の見方を教えて頂きながら胃がんや大腸がんの肝転移症例でAmigo2発現を調べると、原発巣に比べて肝転移巣で高発現しておりました。さらに、予後に関してもAmigo2高発現患者では不良であることがわかりました。

本研究はヒト大腸がん肝転移株の樹立の前段階、練習用としてマウス線維肉腫細胞から肝転移株を樹立するところから始まりましたが、最終的に肝転移のドライバー分子を同定することができました。加えて、国際誌に受理され学位論文に、さらに本研究奨励賞の受賞にも繋がり、まさしく私のAmigoに出会えた思いです。

現在は、国立がん研究センター研究所がん分化制御解析分野の岡本康司分野長のもとで大腸がん幹細胞のheterogeneityを解明する研究に取り組んでおり、刺激的な毎日を送っております。

最後になりましたが、学部生の頃からご指導頂きました岡田先生に改めて御礼申し上げます。また、肝転移株樹立に始まりドライバー分子同定に至るまでの進捗を第24回から第26回の本学会でご報告する中で、論文発表に直結する多くの厳しく貴重なご意見を頂戴し、感謝の念に堪えません。今後ともご指導ご鞭撻を頂きたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

寄稿3：第22回日本がん転移学会研究奨励賞を受賞して

受賞課題：ゲノム編集技術を応用した胃癌血行性転移関連分子の機能解析

神田 光郎（名古屋大学大学院医学系研究科 消化器外科学）

このたび第22回研究奨励賞を受賞させていただき、また第27回日本がん転移学会学術集会・総会において奨励賞講演の機会を頂戴いたしました。伝統ある、素晴らしい賞をいただき、会長の越川直彦先生、選考委員の先生方、ご推薦をいただきました三森功士先生にこの場をお借りして深く御礼を申し上げます。

私は消化器外科医です。医師になって6年間はひたすら手術手技の研鑽に励んでおりました。そう言う聞こえは良いのですが、「癌の生物学等、難しいことは誰かがどこかで解決してくれるもの」と、単に開き直っている状態でした。しかし、癌診療に接するうちに、「同じ疾患なのに、どうして個々の経過がこれほど多様なのか?」「癌がどこに転移するのは、どのような要素で決定されるのか?」「抗癌剤の効果は何故これほど個体差があるのか?」という疑問が積み重なっていきました。

そんな中、卒後7年目に名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学に帰局し、消化器癌を対象としたリサーチに魅せられていくこととなりました。研究指導をいただきました野本周嗣先生の「我々が闘っている癌は、もつとを辿れば全て遺伝子の病。そこを紐解かねば、打ち克つことはできない。」「どんな些細なことでも目の前で起こる実験結果は、世界初の発見だ。これに勝る興奮はない。」という訓示に感動し、慣れない実験に胸を踊らせて取り組みました。これまでは出来上がった癌とどう闘うかだけを考えていた自分が、「癌がいかにして生まれ、どのように悪性表現型を獲得していくのか」を考えるようになっていきました。

博士号取得後には2年間、米国Johns Hopkins大学Michael Goggins先生のもとで研究する機会を得ました。Goggins先生は膵癌の早期診断法開発を軸としたトランスレーショナルリサーチを推進する旗頭であると同時に現役の消化器内科医でもあり、描く研究のゴールは消化器外科医である私にも強い親近感を得られるものでした。主として全米多施設共同研究で得た膵液（十二指腸液）検体を用いた遺伝子診断法開発研究に携わっていましたが、次世代シーケンサーが急速に普及してきたこともあり網羅的遺伝子解析を経験できたこともののちの研究の大きな財産となりました。

帰国後は、小寺泰弘教授より「実用化を意識したりサーチから独自のプロダクトを開発し、そしてそれを自ら臨床試験で検証しよう。」という大きな目標をいただき、主に胃癌を対象とした研究に着手いたしました。外科医として胃癌診療に携わっておりますと、とにかく胃癌の多様性（病理、転移再発経過、抗癌剤感受性）を実感します。近年、ヘリコバクターピロリの感染率低下と除菌療法の普及、生活の欧米化等により、日本の胃癌は急速に様変わりしており、結果として肝転移が問題となる症例が相対的に増えています。長く胃癌転移の主であった腹膜播種については徐々に治療戦略が構築されつつありますが、胃癌肝転移に対する治療開発は進んでおらず、診断・治療の両面において新規標的分子の同定が望まれています。そこで今回の奨励賞をいただきました「胃癌肝転移形成に寄与する分子の同定」をテーマに研究を進めてまいりました。外科医の意地と言いますか、あえて候補分子は臨床検体を用いて探索いたしました。同時性肝転移を有する胃癌症例から得た組織を用いて網羅的遺伝子発現解析を行い、synaptotagmin 7を抽出しました。門脈内癌細胞注入による肝転移モデルの作成には試行錯誤を繰り返し、安定的モデルが構築できた際の喜びは忘れられません。ノックアウト胃癌細胞株では皮下造腫瘍能が低下していましたが、肝転移形成能はさらに顕著に低下しており、synaptotagmin 7は胃癌血行性転移に対する有望な新規標的分子と考えられました。

このように私は、あえて多様性の大きい胃癌の、あえて多様性の大きいヒト臨床検体からシーズを見い出すことを試みています。そしていつの日か、消化器外科医が開発した分子標的治療薬を用いて切除不能進行癌症例を切除可能にして自ら根治切除する、そんな瞬間を夢見ております。今回頂戴いたしました奨励賞を励みに、診断および治療の両面から癌転移制圧に寄与できることを目指して精進する所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



越川会長と一緒に（左：神田裕介先生、右：神田光郎先生）

第29回日本がん転移学会学術集会・総会の案

会 長 : 横崎 宏 (神戸大学大学院医学研究科 病理学講座 病理学分野)

会 期 : 2020年7月16日 (木) 17日 (金)

会 場 : 神戸国際会議場 (神戸市)

日本がん転移学会会則

第1章 会の名称

第1条 本会を「日本がん転移学会」“The Japanese Association for Metastasis Research”と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、がん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床、開発（薬剤、機器等）研究を通じて実質的討議を行い、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献する事を目的とする。

第3条 本会は、前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会を少なくとも年に1回開催
- (2) がん転移に関する研究発表、情報交換、資料の収集、教育及び研修
- (3) 本分野に関して海外研究者との連携
- (4) その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の事務局は、大阪市中央区大手前3丁目1番69号 大阪国際がんセンター・研究所内に置く。

第3章 会員

第5条 会員は、本会の趣旨に賛同し、評議員、顧問あるいは名誉会員の推薦を受け、理事会の承認を得て入会した個人ならびに法人（法人格のない団体を含む）とする。

第6条 会員である法人の取扱いは次による。

1. 法人に所属する個人はその法人の承認を得れば本会の事業に参加できる。
2. 前項により参加する個人からは年会費を徴収しない。
3. 会員である法人は登録者3名迄と会計事務担当者1名（兼任も可）を決め事務局に届出なければならない。

第7条 会員は評議員会において別に定める会費を納入しなければならない。

第8条 引きつづき2年以上会費を滞納したものは評議員会の議により、その資格を喪失する。

第9条 顧問は理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。また、本会に対して特に功労のあった者は、名誉会員・功労会員として理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。顧問・名誉会員・功労会員は本会の発展のために適切な助言をする。顧問・名誉会員・功労会員は会費を要しない。

第4章 役員および役員会

第10条 本会に会長1名、副会長1名、若干名の理事ならびに評議員、監事2名、事務局幹事1名を置く。

* 事務局幹事は会長が任命し、会長及び理事会の事務を補佐する。

第11条 会長は本会を統括し、理事会・評議員会では議長となる。副会長は、次期会長がこれを務め、会長を補佐し会長に事故のある場合はその職務を代行する。会長・副会長の任期は1年とする。

第12条 理事は評議員会にて、評議員の中から選任される。任期は3年とし、任期終了後1年間は再選されない。理事は会長を補佐し日常の会務について決定し、執行する。理事会の構成は、会長・副会長・理事および前会長とする。理事会は構成員の2/3以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）により成立し、議決は出席者の過半数をもって決する。

第13条 評議員は会員の中から選出される。評議員の任期は3年とし、再任は妨げない。評議員会は会の運営に関する重要事項を審議決定する。評議員会は評議員の1/2以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）をもって成立し、議決は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第14条 監事は評議員の中から選出される。監事の任期は1年とし、再任は妨げない。監事は本会の会計および会務を監査し、理事会・評議員会にて報告する。

第15条 次期会長・理事・評議員・監事の選出は日本がん転移学会役員選任規程に基づく。

第5章 総会および学術集会

第16条 総会は毎年1回学術集会の時期に会長が招集し、総会の議長となって次の議事を行う。

1. 会務の報告
2. 会長が必要と認める事項

総会の議事は出席者の過半数によって決する。可否同数のときは議長の決するところによる。

第17条 会長が必要と認めたときは評議員会の議を経て、臨時総会を随時開催することができる。臨時総会の議案は定期総会に準ずるものとする。

第18条 学術集会は毎年1回会長が主宰し、研究発表、意見交換を行う。

第19条 本会会則第2章第3条の4の規定に基づき各種の委員会を設けることができる。委員会の設置、その構成及び運営方法は、理事会において討議し、評議委員会にて承認する。また会の目的を達成するための具体的、実質的討議を行うため、研究推進会議(班)を設置することができる。その構成及び運営方法は理事会において討議し、評議委員会にて承認する。研究推進活動の経過については、学術集会で報告する。

第6章 会計

第20条 本会の経費は会員が拠出する会費ならびに協賛金等をもってこれにあてる。

第21条 毎年度収支決算は会長が作成し、監事の監査を受け、評議委員会の承認を得て、毎年総会において報告する。

第22条 会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第7章 会則の変更

第23条 本会会則の変更は理事会、評議員会および総会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。付則

本会則は平成12年7月1日よりこれを実施する。本会則は平成14年6月8日一部改正した。本会則は平成18年9月3日一部改正した。平成29年3月25日 大阪府立成人病センターの移転及び名称変更に伴い第2章4条を変更する。

日本がん転移学会役員選任規程

第1章 役員を選任

第1条 会則第15条により次期会長(副会長)・理事・評議員および監事は本規定に基づき選出される。なお、役員は65歳をもって定年とする。

第2章 次期会長(副会長)の選出方法

第2条 次期会長の選出に際しては、評議員全員に告示する。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を理事会に提出し、理事会はこれを討議し候補者1名を推薦する。

第3条 次期会長の選出は評議員会で行う。

第3章 理事の定数と選出方法

第4条 理事の定数は個人評議員より約6名(原則として基礎3名、臨床3名)、法人評議員より約2名とする。

第5条 理事は会則第12条により評議員の中から選出される。

第6条 個人会員理事は評議員の選挙により選出される。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を評議員会に提出する。

第7条 法人会員理事は理事の選挙により選出される。

第4章 評議員の選出方法

第8条 評議員は会則第13条により会員の中から選出される。

第9条 評議員の選出は理事会で行う。

第10条 個人評議員は、一定の条件(細則に定める)を満たす者とする。

第11条 個人評議員の候補者は所定の様式による資料を本会事務局に届け出ること。

第12条 法人会員評議員は理事会で選出する。

第5章 監事の選出方法

第13条 監事は会則第14条により評議員の中から選出される。

第14条 監事の選出は理事会で行う。

付則 1. 理事選挙の施行は次期評議員が選出された(平成15年度)以降とする。

2. 本役員選任規程は平成14年6月8日よりこれを実施する。本役員選任規程は平成15年6月29日一部改正。

3. 本規程の変更は理事会および評議員会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

4. 役員任期は、65歳になる年の12月末で終了する。

日本がん転移学会役員選任規程細則

1. 個人会員理事の選出方法

1) 投票は原則として郵送とする。

2) 評議員は基礎系候補・臨床系候補に各1票投票する。

2. 個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

3. 評議員の資格

1) 3年連続して評議員会を欠席した者はその資格を喪失する。

日本がん転移学会 顧問・名誉会員

2018.07.21～

顧問： ^(故) 菅野 晴夫	杉村 隆	^(故) 明渡 均	
名誉会員：愛甲 孝	入村 達郎	高後 裕	小林 博
今野 弘之	濟木 育夫	^(故) 佐藤 春郎	佐藤 博
^(故) 末舛 恵一	清木 元治	曾根 三郎	谷口 俊一郎
^(故) 田中 健蔵	田原 榮一	^(故) 塚越 茂	^(故) 鶴尾 隆
新津 洋司郎	^(故) 螺良 英郎	^(故) 中村 久也	^(故) 磨伊 正義
宮坂 昌之	門田 守人	横田 淳	渡辺 寛
Isaiah J. Fidler			
功労会員：東 市郎	^(故) 阿部 薫	伊藤 壽記	^(故) 尾形 悦郎
岡田 保典	小野 真弓	垣添 忠生	神奈木 怜児
北島 政樹	^(故) 久保田 哲朗	久保田 俊一郎	桑野 信彦
佐治 重豊	清水 暁	高橋 俊雄	竹之下 誠一
竜田 正晴	田中 紀子	寺田 雅昭	豊島 久真男
中津川 重一	西村 行生	^(故) 馬場 正三	宝来 威
細川 真澄男	松浦 成昭	宮城 妙子	宮崎 香
武藤 徹一郎			

日本がん転移学会役員

会長：夏越 祥次 (28回)			
副会長：横崎 宏			
前会長：越川 直彦			
理事：海野 倫明	岡田 太	国安 弘基	竹田 和由
西岡 安彦	藤原 義之	AGC(株)	日本化薬(株)
監事：土岐 祐一郎	中外製薬(株)		
評議員：足立 靖	有明 恭平	石井 秀始	泉 浩二
板野 直樹	伊藤 和幸	伊東 文生	稲田 全規
井上 正宏	猪原 秀典	上原 久典	大上 直秀
大島 正伸	太田 哲生	大塚 英郎	沖 英次
尾崎 充彦	掛地 吉弘	片岡 寛章	加藤 淳二
加藤 靖正	加藤 幸成	川田 学	神田 光郎
北川 透	北川 雄光	北台 靖彦	北山 丈二
隈元 謙介	小泉 桂一	後東 久嗣	小林 浩
堺 隆一	坂本 修一	坂本 毅治	清水 史郎
下田 将之	園下 将大	瀧口 修司	滝野 隆久
竹内 裕也	田中 稔之	谷口 博昭	茶山 一彰
中 紀文	永野 浩昭	中森 正二	中山 淳
浜田 淳一	早川 芳弘	東 伸昭	樋田 京子
福島 剛	藤田 直也	藤原 俊義	二口 充
星野 大輔	松尾 洋一	溝上 敦	三森 功士
向田 直史	望月 早月	森 正樹	八代 正和
安井 弥	安田 卓司	安本 和生	柳川 天志
矢野 聖二	矢野 雅彦	山口 英樹	山本 浩文
山本 博幸	山本 真義	矢守 隆夫	由井 理洋
横山 省三	吉治 仁志	渡 公佑	
エーザイ(株)	協和発酵キリン(株)	第一三共(株)	大鵬薬品工業(株)

(アイウエオ順)

事務局幹事：大植 雅之

(法人評議員については登録会員の中から各社より各1名選任される)
 評議員任期：平成30年7月21日～平成31年/第28回総会まで
 (第28-30回)

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)		会員番号	
氏名		生年月日	
勤務先	勤務先名称(部所属も記入してください)		
	〒		
	Tel		Fax
	E-mail		
自宅	〒		
	Tel		Fax
	E-mail		
	雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅		
変更年月日	西暦	年 月 日	付で変更します
退会届	西暦	年 月 日	付でもって退会します
その他			

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

事務局から

2011年東日本大震災、2016年熊本地震、2018年西日本豪雨、大阪府北部地震、台風21号、北海道地震と日本列島各地で災害が続いています。

災害により被害を受けられた皆さまに、謹んでお見舞い申し上げます。

=====
[発行・編集]
日本がん転移学会事務局
Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)
E-mail: office-jamr@umin.ac.jp
〒541-8567
大阪府中央区大手前3丁目1番69号
大阪国際がんセンター・研究所内
=====

2018.9